男と女と男（一幕）

横光利一

發表　「我觀」大正十三年四月號
初演　大正十五年（於帝國ホテル演藝場）
新劇協會

春。森の中の樵夫場である。ここだけは樹々の隙から落ちる太陽の光で明るい。中央に丸木を組み合せた仕事場あり。二人の若い樵夫は右を向き、鋸を持つて各自の木を挽いてゐる。下には挽き粉が高く積つてゐる。仕事場から左の方奥へ、細い路が一條谷間へ向つて下つてゐる。

――登場人物三人。音、兼、お里。音は少しハイカラな色白の男。兼は武骨な醜男。お里は二人のゐる田舍宿の女中である。――

暫く無言。鋸の音だけ調子を合せて鳴つてゐる。

遠くで鷄が鳴く。

音　おい。

兼　……。

音　俺ア、商賣變へしようかと思うとるのや。

兼　何ぜや？

音　こんな商賣、もう阿呆らしなつて來た。

兼　何ぜや？

音　お前、考へてみい。俺ら一日、汗水たらして氣張つてゐるのに、それにお前、電氣の奴ア俺らのすること、たつた五分間でして了ひやがるが。阿呆らしい。

兼　しやうがないわ。

音　しやうがないで、阿呆らしいのぢや。もう直きにうかうかしてたら、俺ら上つたりや。

兼　さうかて、他に何んにもすること、ないぢやないか？

音　俺アひとつ、役者になつてやろか思うとるのや。

兼　……。

音　良えぜ、役者は。

兼　阿呆らしい。

音　遊んでて、女にもてて、第一鋸のやうなもの持つこと入らんわ。（突然芝居口調になり、）そこへ行くのは、おかるぢやないか。さう云ふお前は勘平さん。つてなこと、云うてりや良ぇのぢや。面白いのう。あはははははは。

兼、默つて微笑してゐる。音、鋸を木の挽き口に突き刺したまま、立ち上つて腰の手拭で汗を拭く。遠くで鶏が鳴いてゐる

音、手拭で鉢巻きをし、顔をひき締め、ひとり挽き粉の上で立ち廻りの眞似をし出す。「えいッ、やッ、はッ。」とかけ聲をかけ、敵に肩口を斬りつけられた表情に落ち、苦悶の後、背後へどつと倒れ、兩足を跳ね上げ、俄に兩手を擴げると大の字に寢そべる。

音　あーあ樂ぢや。樂ぢや。（空を動かずに眺めてゐる。）

兼　いつぺん、鯉を食ひたいのう。

音　……。

兼　鯉も、夏にならんと美味（うま）うないのう。

音　（森の梢の方を指差し、）あつこの、山雀（やまがら）の雛つ子の奴ア、お前の鋸が光るので、びつくりしとるが。

兼　この間、一疋落ちよつた。

音　親鳥やをるのかいなア？

兼　そりやをるさ。二時間目位に歸つて來とる。

音　さうかいなア。（立ち上り、暫く頭の上を仰いでゐる。）あの巣を取つてやろかな。

音、小石を捜すやうにして、森の中を奥の方へうろうろと廻る。

兼　お里（さと）はまだ來よらんかい？

音　（谷の方を見降ろす。）まだや。今頃は辨當の中へ、ら、つ、き、よ、う、を入れとるわ。

兼　今日は遅いのう。

音　まだ來るもんか。

兼　もう正午（ひる）になつてるやろが？

音　寺の鐘や鳴つたかなア。

兼　鳴つたさ。

音　あつこの、次郎兵衛さん所の櫻の花は美しいのう。まるで雲みたいななア。寺の櫻よりや、美しいわ。

遠くで牛の鳴き聲がする。

音　（谷間を見降ろしながら、舊劇の臺詞を口誦む。）ハテ絶景かな、絶景かな、春の眺めは價千金とは、や小（ちひ）せえ、小（ちひ）せえ、この五右衛門の眼からは萬兩、くれの櫻もまた一しほ、ハテうららかな、眺めぢやなア。（口ずさみつつ中途でくるりと向き返り、挽き粉の上まで來ると、まだ木を挽いてゐる兼を見て、）おい。そんなこと、やめつちまへ。阿呆くさい。

兼、鋸を木の挽き口へ差し込んだまま、汗を拭く。

音　（挽き粉の上へあぐらをかく。）そんなこと、電氣に頼んでして貰へ。くるくるつと廻つたら、それで了ひぢや。阿呆くさい。俺アもう阿呆らしなつた。東京へ行かうかな、東京へ。

東京へ行きアのう、自動車に乘つて、横つちよへ、一寸女の二人位ゐ乘せて、ポーツ、ポーツぢや。良(え)えぢやないか。おい、兼公、東京へ行かんか。うん？　東京は良(え)えぞ。こんな山ん中で、鋸持つてらつきよう食はされて、本當(ほんま)に阿呆らしうて言葉(もの)が言へんわ。阿呆くさい。

兼、ひとり默つて森の奥へ行き、小路の端から谷の方を見降ろしてゐる。薪を割る音がする。牛が鳴く。

兼　菜の花は大分良う咲いて來たなア。

音　（兼の方を一寸振り返り、にやにや薄笑ひを洩しながら、）お里はまだ來んわ。

兼、再び音の傍へ戻つて來る。

音　お里は來たかい？

兼　中の谷にや、良(え)え草が生えて來たなア。

音　おいおい、他人事(よそごと)いふなよ。

兼　何い？　（と笑ふ。）

音　角力（すまふ）とらうか？

兼、默つて坐らうとする。

音　（急に立ち上り、）やツ。（と聲をかけて兼に組みつく。）

兼　よせよ、よせよ。（よろよろとして踏み堪へる。）

二人はだんだんと本當の角力をとり始める。そこへ、右手の森の奥から、お里、辨當を下げて樵夫場へ來る。二人はお里の來たことに氣附かない。お里、暫く二人の角力を默つて眺めてゐる。二人は一緒に轉がる。音、ひとり起き上る。

音　（お里の立つてゐるのに氣がつくと、芝居の口調で、）そこにゐるのは、お里ぢやないか。

兼、勢ひよく起き上つてお里を見る。

お里、二人の方へ近よつて來て辨當を挽き粉の上に降ろす。

音　今日はえらうお化粧（めかし）してるなア。

お里　知らん。

兼　遅かつたのう。

お里　（兼を見て、）遅い？

音　今日の辨當は、何が這入つてるのや？

お里　知らん。

音　またらつきようか？　俺アもう、あれにや閉口やぜ。第一、がりがり鳴りさらすことからして、氣に食はんわ。

お里　見てからお云ひ。

音　（辨當の傍へ近より、風呂敷を擴げながら臺詞で、）待て、まてまてまて家來共、とかく戰さと云ふものは、腹の空いては出來ぬもの。ここらの茶屋で、ちよいと飯食つて、（急に普通の言葉になり、）どうぢやお里さん、俺ア、芝居の役者にならうと思うとるのやがな。本當やぜ。俺アもう木挽や嫌ひになつた。ねえ、一日せつせと汗水たらしてさ、たつた一圓五十錢はちや貰へやせんしさ、おまけにお里さんにや、嫌はれるし。電氣でくるくると木い挽いてみい、そんなもん、俺のするこたアたつた一分間や。そこへ行くと役者は良え。ら、つき、よは食はいでも良えし。アツ、こりや今日は蓮根や。おい兼公、今日はめづらしい蓮根やぞ。

兼、音の傍へ行き辨當をとる。音、ひとりさきに辨當を食べ出す。次いで、兼食べる。鶯が梢の方で鳴く。お里、挽き粉の上へ坐る。

音　お里さん、今日はひどう沈んでなはるなア、めづらしことや。それに蓮根や。こりや雨が降らにや結構やが。

お里　鶯が鳴いてるわ。（と梢の方を仰ぐ。）

兼　（箸で梢を指差し、）あつこに山雀（やまがら）が巣をしときよるわ。

音　お里さん、お前、賢いでなア、谷へ降りて、水いつぱい汲んで來てくれんかな？

お里　山雀（やまがら）の巣つて、どこに？

兼　そら、あつこの木の又の所や。赤い葉があるやろ。

お里　はアはア。

兼　あの横つちよの、その上の。

お里　アツ、鶯が飛んでるわ。

兼　ありや目白や。

音　お里さん、水、汲んで來てくれよ。

お里　私（あて）ら、もう澤山（たんと）飲んで來たわ。

普　言（ぬ）かしやがれ。（と笑ふ。）こんねに辛い蓮根食はしときアがつてな。

お里　あんたら、辛い物の方が良かろが。

音　何ぜい、俺ア酒飲みやないぞ。

お里　さうかて辛い物の方が勢(せい)がつくわ。

音　そりや反對や。氣いきかせて水の一ぱい位ゐ、汲んで來てくれ。

お里　私(あて)、椿の花が欲しいわ。

兼　何するのや？

お里　私(あて)、歸りに八幡さんへお參りして來たいのや。

音　えらう殊勝なこと云ひ出したものやなア。

お里　どこぞに椿の花、無いやろか？

兼　森の奥へ行きやあるわ。ほしけりや後で取つて來てやろか。

お里　はア、取つて來ておくれんか。

兼　辨當食うたら行つて來う。

音　椿の花は、もう皆(みんな)、首がとれてるわ。

暫く三人は默つてゐる。お里は挽き粉を弄びながら、谷間の方を眺めてゐる。鶯と目白がしきりに鳴く。

お里　私。こんな所で一日遊んでゐたいわア。

音　安い女子やのう。

お里　何ぜ？

音　遊ぶことばかり考へてゐやがつて。

お里　私、もう御飯焚きやら、洗濯するのがいやになつたのやもん。それより、前のおれんさんみたいに、朝早やうから山へ草刈りに行く方が良えわ。毎日お陽さんの出んうちに山の霧吸うて、草刈りしてたらきつと長生きするわ。

音　お前らに草刈りや出來るかい。指ばつかり斬つてら。

お里　私、故郷の田舎にゐたときや、毎日これでもしてたのえ。あんたら、馬を良う使ひなはらんやろが、私ら馬の三疋ぐらゐなんでもないわ。

音　豪さうなこと云ふな。鼠が出りや、飛び上つてるくせになア。

お里　私、これから歸つたら、また晩の準備せんならんのや。もういややわア。一年中こんなことばつかりしてるのやもの。

音、兼、二人は辨當を食べ終る。

音　お里さん、蓄音機聽かしてやろか。うん？　なかなか上手いぞ。勸進帳や。（唸り出す。）そ

れつらつらおもん見れば、大恩教主の秋の月は、涅槃の雲に隠れ、生死長夜の長き夢、驚かすべき人もなし。爰に中頃(なかごろ)の帝(みかど)おはします、御名を聖武皇帝(くわうてい)と申し奉り、最愛の夫人に別れ、戀慕の情止み難く。(突然どつと立ち上ると、お里の方へ馳け寄り、その肩を背後から抱きすくめる。)

お里　いややわ、いややわ。

音　何がいやや、戀慕の情やみ難く、これお里どの。(とお里の顔を覗く。)

お里　阿呆らしい。

兼　(苦き顔をする。)お里さん。椿や今の方がええか？　歸りでええか？

お里　(兼の方を向き、)大きに、取つて來ておくれるか。

兼　澤山(たんと)入るのか？

お里　一寸で結構やわ。ほんの奉(あ)げるだけありや良(え)えのやわ。

兼　ぢや取つて來う。

お里　濟まんなア。

兼、ひとり森の奥の方へ消えて行く。

音　(お里を抱いたまゝ、)今度は何を聽かしてやろ？　新派の方が良(え)えか。

お里　私、何んにも聽きたうないわ。（と沈み込む。）

音　まア聽けよ。俺ア役者にならうと思うとるのや。

お里　（音の顔を仰ぎ、）本當？

音　嘘云ふかい。

お里　私、いや。

音　いやかて、仕方あるかい。こんな樵夫みたいな商賣してたら、いまに上つたりや。

お里　（愁ひ氣に、）役者になるの？

普　定つてら、ひとつ、今からうんと稽古しといてやるんぢや。新派が良えか、新派きかしてやろか。ドラマぢやぞ。ドラマつてお前ら知るまいが？

お里　もう良えわ。

音　まア聽いとくもんぢや。稽古臺になつてくれよ。金色夜叉を聽かしてやろ。（聲色。）宮さんお前でも泣くほど酷いと云ふことを知つてゐるのかい。貫一は、貫一は、大馬鹿者にされて仕舞つた。僕は血の涙を流しても足りはせんよ。出し拔に家を出るばかりか、何んの一度の便をせぬ處を見ると、始めつから富山に出會ふ手筈が出來てゐるのだ。それとも一緒に來たのかも知れない。お前は奸婦だよ。淫婦だ、云はば、……

お里　もう結構やわ。

音　あかん、腹ふくれたら、上手いこと、ドラマも云へん。今度はひとつ好え所を聽かしてやろ

な。浪さんや、良からうが。

お里　いや、いや。

音　何ぜや、今日に限つて、どうしたのや？

お里　私（あて）、考へごとがあるのやわ。

音　くよくよしたこと云うてくれるない。陰氣くさい。浪さんでも聽けよ。ええか、浪さんが、

（と、聲色を一言云ひかける。）

お里　もうえつたらえ。

音　お前、俺の浪さんやないか。

お里　うるさいわ。

音　武雄さんの云ふこと聽いとれ。そやなけりや、そんなもの浪さんぢやないぞ。

お里、靜に首を垂れてゐる。

音　（再び聲色で、）浪さんが亡くなれば、僕も生きちや居らんよ。（普通の聲になり、）おい、お前浪さんみたいにせんかい。ドラマやないか。泣かにやあかん。ええか？　浪さんが亡くなれば、僕も生きちや居らんよ。

お里　音さん。（と見上げる。）

音　（声色を續ける。）もし私が死にでもしましたなら、あなた、時々思ひだして下さるでせうか。……ああもう、こんな話は止さうぢやないか、それよりか浪さんは、早く養生をして、癒(よ)くなつてねエ浪さん。

お里、何か云ひたさうに口を動かす。

普　（續ける。）此のままわたしは死んでもあなたの妻ですわ。未來の未來の後まで、わたしは良人(あなた)の妻ですわ。

お里　音さん。もうやめて。

音　聽いとれ。（聲色を續ける。）あなた、もういらつしやるのですか。ああ直ぐと歸つて來るよ。浪さんも充分に注意して、早くよくなつてゐなさい。ぢや浪さん、行つて來る。ぢや早く歸つて頂戴ナ、直ぐ歸るよ。早く歸つて頂戴ナ、ねェ、早く歸つて頂戴ナ。

お里　音さん、本當に役者になるの？

音　本當さ。

お里　私(あて)、いややわ。

音　良(え)えぢやないか。

お里　私(あて)なア。（と、音の顔をぢつと見る。）

音　妙な顔するな。
お里　私（あて）、……
昔　何んぢや？
お里　私（あて）これえ。（と下腹に手をあてる。）
音　（驚愕）本富か！
お里　本當。
音　嘘つけ！
お里　嘘云ふかいな。
音　（お里を突き放す。）俺ア、知らんぞ！
お里　まア！
音　そんなもの、知るかい！（立ち上る。）
お里　本當え、本當え。
音　本當でも嘘でも、そんなもん、俺知らんわ。

お里、挽き粉の上へ顔を伏せて泣く。

音　下（お）ろして了へ。

お里　（再び顔を上げ、音を睨みながら、）あんた、私（あて）を瞞したのか！

音　何が瞞した！

お里　瞞したのやないの。瞞したのやわ。私（あて）、あんたをそんな人やと思うてなんだ。

音　勝手に言（ぬ）かしてよ。

お里　嘘つきツ、嘘つきツ！

音　何が嘘つきや？　俺やお前に子供を産んでくれつて頼んだか！

お里　そんなこと仕方ないわ。

音　それ見よ。

お里　あんた、勝手者や、さんざ甘いことばつかり云うといて。

音　そりや手前ぢや。

お里　あんたやないの！

音　勝手にぶつぶつ云うてやがれ。俺や、お前みたいな女に惚れたかい。

お里　あんたからやないの。あんたが上手（うま）いこと瞞したのやないの。

音　手前が俺をひつぱつたのや。俺は、すまぬけどな、まだ女子（おなご）みたいな代物（しろもの）に惚れたことがないのぢや。阿呆らしい。

お里　役者ツ。

音　へん。役者でも、お前みたいな女に誰が惚れる！　痩せても枯れても、まだ俺や音さんぢ

や。

お里、挽き粉を掴んで音に投げつける。音、足で挽き粉を投げ返す。

お里　嘘つきツ、色魔ツ、阿呆ツ。

音　くやしけりや、泣けツ。

お里、立ち上り、音を目がけて飛びつく。音、お里の肩を突き飛ばす。お里、ばたりと倒れ、しやくり上げて泣く。が、再び起き上ると、急に悲しげな顔をして音を見詰める。

お里　音さん、私（あて）を捨てたらいやえ、捨てたらいやえ。

音　（笑ひながら、）捨てるも糞も、ないやないか。

お里　私（あて）、捨てたら、私（あて）、……

音　もう、やめてくれ。なさけない！

お里　あんた、私（あて）を捨てるつもりか？

音　俺や、知らんて。

お里　音さん。

音　俺は、明日(あした)から東京へ行くんぢや。

お里　本當か！

音　さうとも。

お里　私(あて)を捨てて行くの！

音　捨てるも糞もないぢやないか。お前、俺に惚れてゐやしやうまい。

お里　いやや、私(あて)。（蒼白となる。）

普　もう、なさけない聲出さんといてくれつたら、お前らに相手になつてゐられんわ。

お里　東京へ本當に行くの？

音　本當さ。こんな木挽(こびき)してたら、十年たつたら飯(まま)が食へんやうにならア。

お里　ひとり行くのか？

音　定つてらア。

お里　私(あて)も連れてつて。

音　お前、東京へ行つて何するのや？

お里　何んでもするわ。

音　何が出來るい。それこそ、お前ら淫賣にでもならア。

お里　私(あて)、こんねに頼んでるのに聞いてくれんのか？

音　谷へ行つて、水でも飲んでくるわ。

お里　私（あて）を捨てるの！

音、默つて谷の方へ歩く。

お里　（膝を立てて、）音さん。

音、谷間の方へ消える。

お里　（立ち上り、）音さん。

お里　（默つて音の降りた谷の方を見ながら、）阿呆ッ！　阿呆ッ！（と叫ぶ。）

お里、再び挽き粉の上へ坐り込み、顔を伏せる。鶯が鳴く。目白が鳴く。暫くして、兼、花の咲いた椿の小枝を持つて、森の奥から歸つて來る。お里の泣いてゐるのを見て、暫く立つたまま彼女を眺めてゐる。お里、顔を上げる。

兼　どうしたのや？

お里　（小さな聲で、綺麗なこと。濟まなんだわなア。

兼　（お里の傍へ近寄る。）どうしたのや？

お里　（笑ひながら、）何んでもないの。さつきから、頭が痛うてな。もう歸ろうかと思うてるのやけど、ひどう痛んで來たものやでな。

兼　ひどう痛むのか？

お里　（頭に手をあて、）いいえ、何んでもないのやわ。（谷の方へ眼を外らす。）菜畑は綺麗やなア。櫻の花より、私（あて）、菜の花の方が好きえ。（急に思ひついた如く、）ア、せつかく椿とつて來てもろといて忘れたわ。大きに。大分奥（だいぶん）の方まで行つたの？

兼　いや。音公はどこへ行つたのや？

お里　谷へ水飲みに降りて行つたわ。

兼、椿をお里に渡す。

お里　（椿の花を眺めながら、）これ、單重椿（ひとへつばき）やな？　蜜があるやろか。私（あて）、小（ちひ）ちやい時に、よう椿の蜜を舐めて鼻を眞つ黄にしたわ。

兼、お里の傍へ腰を降ろす。

お里、また沈み込む。

兼　（自分の膝を両手で抱き、）あつこにゐる牛は、ありやどこの牛かいな？

お里、兼の見てゐる前方を見る。

兼　ええ牛や、なかなか。

お里、また沈み込んで默つてゐる。

兼　（お里を見て優しく、）まだ頭痛いのか？

お里　（兼をなまめかしく見上げるやうにして、）もう癒つたの。

兼　音公が何（なん）どしたのか？

お里　（椿の花瓣を弄びながら、）あの人、私、大嫌ひえ。

兼　何（なん）どしたのか？

お里　ううん。（と頭を横に振り、）あの人うるさうて。

兼　音公どないしたのや？

お里　何んにもしやへんけど、ドラマやたら何んやたら云うて、芝居の眞似ばつかりしてはるや

もん。私(あて)、いやらしうて、いややわあんな人。

兼　（谷間の方を眺め、）もう上つて來よるやろが？

お里　兼さん。（あたりを見廻す。）

兼　何んぢや。

お里　あんたなア。

兼　うん。

お里　（益々なまめかしく、）私(あて)、……

兼　何んぢや？

お里　羞しわ。

兼　何んぢや、云はんか？

お里　あんた、私(あて)、ほんとに好き？

兼　うん。

お里、沈む。

兼　好きや。

お里、默る。

兼　俺や、好きやが、……

お里、なほ默りながら嬉しさうに媚ぶ。

兼　何んぢや？

お里　私（あて）、ほんたうに嬉しいわ。

兼、喜ばしげに、片手をお里の肩にかける。

お里　兼さん、私（あて）な。

兼　うん。

お里　……。

兼　何んぢや？

お里　さうか、もう云はんとかう。

兼　云へよ。俺ア……。

お里　怒るわ。

兼　怒るかい。何んぢや？

お里　……。（俯向いてゐる。）

兼　（にじり寄り、）どうしたのや。

お里　（益々なまめかしく兼を見詰め、）私（あて）、これえ。（と、片手で自分の下腹を持ち上げるやうにする。）

兼　（氣附かぬらしく、）これつて何んぢや。

お里　これ。（と前と同じ眞似をする。）

兼　そりや、どうしたのや？

お里　子供が出來るのやわ。

兼　（爆（はじ）けるやうに喜ぶ。）本當か！

お里　ええ。（微笑。）

兼　さうか。本當か、嘘云へ！

お里　嘘云ふかいな。

兼　いつや？

お里　もう三月（みつき）。

兼　うまい。本當か。嘘云ふなよ。

お里　（喜ばしげに、）本當やってば、私、そやで今日も歸りに八幡様へ參って、椿を奉げて來よう思うてるのやわ。そやで、あんたに頼んだの。

兼　さうか。そんなら、俺や用意せんならん。三月か。

お里　ええ。

兼　三月なら、もう後、七月や。そしたら、二人で俺の故郷へ歸ろ。

お里　連れてってくれるか？

兼　うん。行こ行こ。お前、もう丸髷結うたらええ。俺にや、今五百圓貯金したるのや。

お里　そんねに澤山？

兼　うん。歸ったら、それで山を買はう、山買うて杉苗植ゑるのや。そしたら、一年たちや二尺になるわ。來年の春が来たら、山いっぱい芽が出る。サッと芽が出たら、もう締めたものや。五百圓が、いっぺんに千圓になる。そしたら、

お里　千圓に？

兼　うん、千圓位ゐ見てる中や。そしたら、田を買うて、家建てて、

お里　家も建てるの？

兼　建てるともい。お里さん、何ど買うてやろか、何が欲しい？

お里　私、もう何んにも入らんわ。（不安さう。）

兼　お召か、小紋縮緬の方が良えか？

お里　私（あて）、入らんわ。（益々不安さうな顔になる。）

兼　さうかて、何ど入るものがあるやろが？

お里、默つて俯向いてゐる。

兼　さうか、三月（みつき）か、そりやうまい。

音、谷の方から上つて來る。

音　中の谷の水飲まう思うたら、蛭がゐやがつた。あつこの水は、臭うなつたなア。

兼　（默つて立ち上り、うろたへ氣味で、）さうか。（と云ふ。また直ぐ坐る。顔赤し。）

お里　（前方の景色を眺め、）兼さん、あつこにゐる牛は、あれは又次郎さんの所の牛やえ。朝鮮牛やもん。

兼　（音を見て少し媚びた氣持ちで、）姪がゐよつたてか！

音、注意深く默つて兼の顔を見詰めてゐる。また、鶯が鳴く。兼の顔いよいよ赤い。

兼　俺も、もうあの水は飲まんわ。

音、にやにやと笑ひ出す。兼、そはそはして前方を向く。

音　ははア。（とひとり合點の貌。）

お里　（あたりを見廻し、）もう鶯が鳴かへんわなア。どこへ行きよつたのやろ？

兼　（上を仰ぎ、）今まで鳴いとつたな。毎日三べん位來よるのやが、どこぞそこらに巣かけてあるのやろ。

音　兼公。

兼　うん。

音　お前、その女に瞞されやせなんだか？

兼　何い？

音　瞞されたら、あかん。

兼　阿呆云へ。

お里、憎々しさうに音を睥む。その中に慄へて來る。

音　そんなら云うとくが、そ奴ア、仕様のない女やで、お前、ひつかかつたら駄目ぞ。

兼　何ぜい？

音　ひつかかつたのか？

兼、默る。なほ顔赤し。

音　何んぢやい、もうひつかかつたのか。お前や、女にのろいで駄目わ。

お里　ひと、阿呆にするなツ。（怒聲。）

音　どつちがぢや？（と笑ふ。）

お里　ひと……本當に、色魔ッ。

音　手前ら默つてよ。おい兼公、お前ほんとに、そ奴に嬲られたのかい？　その女は淫賣みたいな奴やで、そ奴の稽古臺になつたら駄目ぜ。

兼、音を見上げて怒る。

音　お前、俺に怒つてるなア。俺は、お前のため思うて云うてるのやぞ。何も俺は、やきもち燒いてるのやないぞ。ええか。

兼　俺の勝手ぢや！

音　（嘲笑しながら、）こりや駄目（あかん）。

兼　（なほも怒り、）何んぢやい。

音　おい、兼公、しつかりせツ。

兼、默る。

音　そ奴（いつ）を蹴倒せツ。

兼　何ッ！

音　そ奴（いつ）を蹴倒してやれツ。

兼、立ち上つて音に飛びかからうとする。

音　（益々嘲笑の微笑を浮べ、）お前や、阿呆らしゆて、言葉（きり）が云へんわ。あかんあかん。（と横を向く。）

兼、力の入れ所なく突き立つたまま拳を握つてゐる。

音　俺を擲打る氣か？　擲打るなら擲打れ。そやけど、そ奴に瞞されたら八年目ぢや。その我鬼や俺を瞞そとしやがつたのやが、俺が、あつちやこつちやに瞞してやつたものやで、お前に食ひつきさらしたのや、お前に何ぞ手管しやがらにや良えがと思うとつたのやが、とつとやりやがつて！　くそめ！　おい、お里。

お里、悲しみと怒りの表情でその場に泣き伏す。兼、音を見て慄へてゐる。苦悶。

音　（お里に、）お前みたいな奴ア、歸んで來いッ。

音、辯當の空箱をお里の頭の傍へ投げつける。

兼　（いかり立ち、）俺や、かまふかい。瞞されても良えのぢや。

音　そんなら、ええわ。

兼　抛つとけッ！

音　そんなら云ふが、そ奴ア、俺の子供を產みよるぞ。

兼　何ッ！

音　それで良(よ)けりや、俺も良(え)えわ。勝手にするぢや。

兼　本當か！　（立ち益々苦悶。）

お里　嘘やわ、嘘やわ。（と顔を上げて叫ぶ。）

音　まだ、そんなこと言(ぬ)かしてやがらア。

お里　嘘やツ嘘やツ。（再び泣き伏す。）

音　おい、兼公、怒るな。そんな女なら、今に俺や千人でも世話してやるわ。抛かして了へ。

兼、なほも慄へてゐる。

音　俺やお前がそ奴(いつ)に氣があつたのをうすうす知つてたけど、そんな奴にお前が嬲られたら、それこそ一生臺なしやと思うたで、俺も嬲つといてやつたのぢや。そんな奴(やつ)ア、そんな手管しやがるのは、定つてるのぢや。

兼、手を垂れ、呆然としてゐる。

音　お里。早よ歸(い)ね。

音、自分の鋸を突き刺した木の方へ歩む。
一同沈黙、鶏が遠くで鳴く。

音　兼公、早よ仕事せいよ。

音、ひとり木を挽きにかかる。
兼、なほも動かず。

音　（兼の方を見て、）お前、そんねに惚れてたのか？

兼　……。

音　俺やまた、お前もお前流に嬲ってたのやと思うとつたのやが。何んぢや、阿呆くさい。（木を挽く。）

お里、起き上り、頭の傍の辯當箱を拾ひ、音をめがけて投げつける。

音　（笑ひながらお里を見て、）へん、歸ね歸ね。

お里　色魔ッ、嘘つきッ。

音　口惜(くや)しけりや、かかつて來い。

お里　阿呆ッ！

音　今度は、誰の番ぢや！　うん？　せんど稽古しといて、子供でもころころ產んでくれ、あはははは。（叉、木を挽く。）

お里、椿の花を忘れたまま谷の方へ歩く。

兼、動かず。

音　おいお里、辯當の空箱(からばこ)でも持つて歸れ。

お里、消える。

音　（振り向き、）何んぢや、をらんのか。犬みたいな奴やなア。兼公、こつちへ來んか。うん？あんな奴は、あれで良(え)えのぢや。

音、鋸を放し、兼の傍へ寄り優しく肩に手をかける。

音　おい、怒るなよ、あんな奴ア、食はしときや良えのぢや。なア。今に俺ア、もつと良えのを世話してやろ。保證づきのをのう。しつかりせツ。（と肩を叩く。）

兼、音に誘はれるままに鋸の傍へ歩んで行く。

音　それよか、一緒に東京へ行こ、東京へ。こんな商賣は、ええ加減にきりつけてやめつちまはう。そやなけりや、今に俺ら上つたりや。なア。

音、木を挽きにかかる。兼、ひとり默々として立つてゐる。

音　俺や役者になるでなア、そしたら、お前仕事が手につくまで、俺は養うてやるわ。何アんの、二人位ゐ、どこででも食へるが。そんなこたア、へのかつぱぢや。（急に聲色になり、）そこに行きやるは、おかるぢやないか。さう云ふお前は、勘平さんツか。

音、ひとり木を挽く。兼、なほ立つたまま谷間の方を見て、ぼんやりとしてゐる。

音　何を考へてるのや？

兼　（低い聲で、）俺や、あ奴（いつ）が好きや。

音、鋸から手を放し、ぼんやりして兼を見上げる。牛が鳴く。どちらも無言。

兼　（突然、）おい。東京へ行こか？

音、默つて娘の顔を眺めてゐる。

兼　俺もつれてつてくれんか？　いつ東京へ行くのや？

音、淋しげになほも默る。

兼　仕事しようか。どれ。

音、手に唾をつけ、鋸に手をかける。自分の感情を見せたくないかの如し。

音　お前、あの女に、そんねに惚れてたのか？

兼　いや、何。……

音、首を垂れて默々としてゐる。

兼、ひとり木を挽く。

音　（兼を見上げ、）ほんとに惚れてたのか！

兼の鋸の音ますます激し。

（間）

沈默長し。

音　（自然自嘲的に、）阿呆くさい。何んぢやあんな奴！（立ち上る。）おい、お里の奴を、擲打（なぐ）りつけてやれ。

兼　（自分の鋸の齒痕を見詰め、）アツ、こりや失敗（しも）た。目が大ぶ脫（はづ）れやがつた。

二人、默々と並びながら、木を挽き出す。

――幕――

底本　現代日本戯曲選集　第５巻
著者　伊藤整　等編
出版者　白水社
出版年月日　１９５５